

校長室より

令和5年2月22日(水)

「ひび割れつぼ」



昨年10月の就学時健康診断で、講師の山原雅美先生からいただいたお話です。
インドのある水運び人は2つのつぼを持っていました。

その2つを天秤棒の左右につけて肩にかけ、ご主人のために毎日水を運んでいました。

でも、片方のつぼには、ひび割れがあったので、いつも水が半分こぼれていました。もう片方のつぼは完璧で、自分は役目を十分果たしていると満足していました。ひび割れつぼは、自分のひび割れを情けなく思い、いつもみじめな気持ちになるのでした。ある日、ひび割れつぼは、とうとう水運び人に言いました。

「私は自分が恥ずかしい。私にはひび割れがあって毎日水が半分こぼれ、あなたの役に半分しかたっていない。それがとても辛いんです。」

それを聞いて水運び人は、ひび割れつぼに優しく言いました。

「今度歩く時に、道端の花をよく見てごらん。」

そう言われて、次の日、ひび割れつぼは、毎日通る道に美しい花が咲いていることに気づきました。美しい花を見て、少し元気になりましたが、ご主人の家に着いたときには、やはり水は半分しか残っていませんでした。

「やはり私は役に立たないつぼだ。ごめんなさい。」

すると水運び人はこう言ったのです。

「気がつかなかったかい。道端の花は君の側にしか咲いていなかったらう。

僕は君のひび割れを知ってから、君の通る道に花の種をまいておいたんだ。

毎日そこを通るたびに君は種に水をやり、花を育ててきたんだよ。

僕は毎日その花をご主人の食卓に飾ってきた。君のおかげでご主人は、きれいな花を眺めながら食事を楽しむことができるんだよ。」

人はみな、ひび割れをもっています。ひび割れを見つけたとき、私たちができることはひび割れを責めることでも恥じることでもありません。ひび割れをふさぐこともできるでしょうが、もっといいのは、そのひび割れを活かすことかもしれません。

